

## 論文内容の要旨

Characteristics of suicide completers presenting to an emergency care centre in Japan: A comparison with suicide survivors

(日本における救急搬送された自殺既遂者の特質について：自殺未遂者との比較に基づく考察)

(佐藤瑠美子, 大塚耕太郎, 岩戸清香, 遠藤仁, 中村光, 大沼禎史, 佐賀雄大, 水谷歩未, 三田俊成, 山家健仁, 遠藤重厚)  
(BMC Psychiatry (投稿審査中))

### I. 研究目的

これまで警察統計以外, 自殺既遂者に関する大規模調査はなく, 救急センターにおける報告が散見されるに留まっている. 重篤な手段を用いた自殺未遂は自殺既遂に類似した特質を持つと指摘されているが, 既遂例それ自体の詳細な検討も必要であることは言うまでもない. 本研究では, 岩手県高度救命救急センターに搬送された自殺既遂者群を未遂者群と比較することで前者の特性を明らかにし, 自殺既遂と関連する因子を特定することを目的とした.

### II. 研究対象ならび方法

2002年4月1日から2010年3月31日までの8年間に岩手県高度救命救急センターに搬送された精神科関連1934件を母集団とし, 上記調査期間内の初回自殺企図1193例を調査対象とした.

年代, 性別, 国際疾病分類第10改定版「精神および行動の障害」(以下, ICD-10診断), 生涯の自殺企図の既往, 1年以内の自殺企図の既往, 手段, 動機, 精神科通院先の有無, 相談先の有無, 同居者の有無, 就労状況, 教育年数, 総合評価尺度(Global Assessment Scale; GAS), ホームズ社会的再適応評価尺度(Holmes social readjustment rating scale)の生活変化単位(Life Change Unit; LCU)などを調査項目とした.

対象を自殺既遂群(114名)と自殺未遂群(1079名)に区分し, 調査項目を2群間で比較検討した. 比率の検定は $\chi^2$ 検定, 数値の検定はt検定を用いた. また, 自殺企図の転帰に関連する因子を抽出する目的で, 自殺企図の転帰を従属変数, 調査項目を説明変数として多重ロジスティック回帰分析を行った. いずれの検定についても有意水準は5%とした.

なお, データは個人が特定可能な項目は除外し個人情報保護に配慮した. 本研究は岩手医科大学倫理委員会の承認を得ている.

### III. 研究結果

#### 1. 既遂群と未遂群の2群間比較

既遂群は未遂群に比して男性の割合, 平均年齢が有意に高く, 年代分布に有意差を認め, 既遂群は50代, 20代, 70代の順に多く, 50代と20代の二峰性を示した. また, 既遂群は未遂群に比較して教育年数が有意に低く, 生涯自殺企図歴と1年以内の自殺企図歴の分布に有意差を認め, 未遂群で既往ありの割合が高かった.

自殺企図の手段の分布に両群間で有意差を認め, 既遂群では縊首, 飛び降り, 毒物, ガス, 焼身など重篤な手段の割合が未遂群より高かった. 自殺の動機の分布に両群間で有意差を認め, 既遂群は不明, 病苦の割合が高く, 未遂群では家庭家族問題, 複合的問題, 対人関係問題の割合が高かった. 受診時のICD-10診断分類の分布に両群間で有意差を認め, 既遂群ではF3(気分障害), 不明, F2(統合失調症)の順で割合が高く, 未遂群ではF3, F4(神経症性障害・ストレス関連障害および身体表現性障害), F2の順であった. Global Assessment Scale(GAS)の平均値は既遂群が有意に低値であった.

## 2. 自殺企図の転帰に関連する因子について

自殺企図で搬送された症例について、既遂と関連する因子の抽出を目的として、既遂群の出現を従属変数、調査項目を説明変数として、ロジスティック回帰分析を実施した。その結果、既遂群となるオッズは、自殺の手段では薬物は薬物以外と比較して 0.012 倍 ( $p=0.045$ )、動機での不明は 20.033 倍 ( $p=0.001$ ) となった。また、GAS が 1 ポイント上がる毎に既遂群となるオッズは 0.899 倍であった ( $p<0.001$ )。

## IV. 結 語

本研究では、性別、年齢ばかりでなく、疾患単位などの区別も超えて、全般的な精神健康度と社会適応水準が、危険な自殺企図発生の予測因子となるという自殺企図者の先行研究における傾向（遠藤仁ら、精神科救急雑誌、2009）が裏付けられ、GAS 得点が低下するほど既遂群となるリスクが高まることが確認された。以上からも、自殺の予見性に関して、生活水準や社会的適応のレベルから全般的重症度を評価し、本人の自殺リスクを類推することが重要と考えられた。

## V. 学位申請後経過

- ※1 最終審査後、Journal of Iwate Medical Association（66 巻 4 号）に掲載予定。
- ※2 査読による内容の変更は不要であった。

## 論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

主査 教授 寺山 靖夫 (内科学講座神経内科・老年科分野)

副査 教授 出羽 厚二 (法医学講座)

副査 准教授 小野田 敏行 (衛生学公衆衛生学講座)

我が国は、先進国の中で年間の自殺者数がきわめて多いという現状を抱えている。自殺者の中には救急搬送後に死亡する例も多いが、救命救急センターに搬送された自殺既遂例についての詳細な検討はまだほとんど行われていない。

本研究では、高度救命救急センターに搬送された自殺既遂者を自殺未遂例と比較し、自殺既遂に関連する因子を検証することを試みた結果、既遂群では薬物のような軽症な手段はとられないこと、Global Assessment Scale (GAS) による生活水準や社会的適応の低い状態と関連があることを明らかにした。

自殺予防という観点から捉えれば、本研究は、生活水準や社会的適応のレベルから全般的重症度を評価し、本人の自殺リスクを類推することの重要性を示した研究であり、学位に値する。

## 試験・諮問の結果の要旨

自殺既遂者の実態、自殺未遂者との類似点と相違点、自殺の危険性との関連因子、自殺の予見性などについて試問し、的確な解答を得た。学位取得にふさわしい学識と指導力を認めた。

## 参考論文

- 1) A case of drug overdose-induced, severe electrocardiogram abnormalities: investigation through plasma drug concentrations  
(過量服薬により重篤な心電図異常を来した1例：薬物血中濃度に基づく検討) (三條克巳, 他14名と共著)  
The Primary Care Companion For CNS Disorders, 14巻, 3号 (2012)
- 2) 自殺対策と自死遺族支援 (岩戸清香, 他9名と共著)  
精神科, 17巻, 3号 (2010)
- 3) 医療支援中のメンタルヘルス, 医療支援復帰後のうつ病 (大塚耕太郎, 他8名と共著)  
Depression Frontier, 9巻, 2号 (2011)
- 4) Aripiprazole から blonanserin への切り替え: 統合失調症5症例に関する臨床的検討 (三條克巳, 他10名と共著)  
臨床精神薬理, 13巻, 11号 (2010)